

# 文献との対話、 人との対話

消滅の危機に瀕した言語、  
書きことば、話しことば

現在、地球では約7千の言語が話されています。日本語を含むこれら全ての言語が、文学部では研究対象になります。ただ、半数以上の言語は、話し手の数が10万人以下であり、消滅の危機に瀕しています。もちろん、すでに消滅し文献のみを残す言語も、研究対象になります。(興味のある方は、Ethnologue—Languages of the Worldというウェブサイトアクセスしてみてください。ちなみに日本語は、話し手の数で言うと世界第9位の大言語です。)

皆さんは、**満洲語という言語のことを聞いたことが、おありでしょうか？**世界史の教科書に、清朝初代のハン（皇帝）であるヌルハチが、1599年に、モンゴル文字を基に満洲文字を作らせたことが載っていたかもしれませんね。1599年と言えば、日本では江戸時代が始まろうとする頃ですが、この時、満洲族は初めて自分たちの言語を記録する文字を持ったのです。

満洲文字がどういう文字か、見てみましょう。図1は、**北京の有名な観光スポットである故宮博物院（もとは清朝の王宮です）の中の、ある門に掛かっている額です。**門の名前が、漢字と満洲文字で書かれています(このような額は故宮の中に数十あります)。漢字は「端則門」、満洲文字は duwan dze men と読めます。漢字の音読みが満洲文字で書かれています。「タンソクモン」と書いてあるようなものですが、仮名と違って、満洲文字は子音と母音を書き分ける表音文字なので、1文字をアルファベット1文字に置き換えることができます。

ではどうやって、対応するアルファベット、つまり発音(の概略)が分かるのでしょうか？例えば、1730（雍正8）年に出版された『清文啓蒙』という満洲語の教科書があります。「清文」とは満洲語のことです。満洲文字の発音をはじめ、単語や文の意味が、漢語（中国語）で説明されています(図2参照)。満洲文字の発音は、発音の類似した漢字を示したり、反切という表音法を使ったりして説明されています。つまり**当時の北京語の発音が分かれば、当時の満洲語の発音の概略も分かる**のです。

現在満洲族は、中国国内に約1,000万人いますが、満洲語を話したり満洲文字が読めたりする人は、もはや皆無に近いのです(中国東北部の田舎に数十人、高齢の話し手がいるのみです)。**満洲族の言語は、話しことばも書きことばも、ほぼ漢語（中国語）になってしまいました。**しかし満洲語には、清朝の行政文書や、漢語からの大量の翻訳など、膨大な文献があります。話しことばではなく書きことばであることを前提にすれば、音に関する研究もできますし、例えば平安時



図1：故宮博物院内の門の額（漢語と満洲語、筆者撮影）

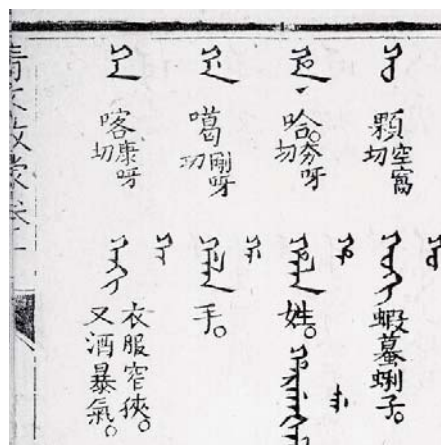


図2：『清文啓蒙』の一部（巻1、2丁裏）

代の日本語を研究するように、文法や単語の構造などの研究も行なわれています。

**その満洲語と言語的に非常に近い関係にあるシベ語という言語が、はるか西方の新疆ウイグル自治区チャブチャルやイーニンで、シベ族によって話されています** (図3・図4参照)。シベ族は、もともと中国東北部にいたのですが、250年ほど前(乾隆年間)に、一部が辺境防備のため現在の遼寧省から新疆ウイグル自治区に移住させられたのです。そのシベ族が、現在でも、満洲語に非常に近いシベ語(話しことば)を維持し続けているのです。話者数は2万数千人かと思われます(彼らの書きことばは漢語です)。満洲語ほどではありませんが、やはり危機に瀕した言語です。

はるばる新疆ウイグル自治区までフィールドワークに行きシベ語を観察すると、シベ語そのものの研究ができるのは当然ですが、**清朝時代の満洲語(話しことば)がどういうものだったかを推測するのにも役立つのです**。以下に、シベ語の文の例を挙げます。/ /内は筆者の作った表記システム、片仮名表記は発音の概略、[ ]内は詳細な発音表記です。文法が日本語と似ていることが分かります。実は、世界の言語の半数近くは、日本語と似た文法を持っているのです。

(a) /si we/. シー ヴェー [ʃi: vɜ:]

あんた 誰?

(b) /bi gene-qu./ ビー ゲネク [bi: gɜnɜqɜ]

僕 行か-ない

(c) /tacyqu-de gene-Xe nane./ タチクテ ゲネヘ ナネ [tatʃɜt gɜnx nan]

学校-に 行っ-た 人

このように、言語研究では、文献を対象にしたり、フィールドワークに出かけて行って話しことばを対象にしたりします。そして、**文献と対話する力、人と対話する力を磨くことになります**。

(出典：図2の画像：フランス国立図書館の電子図書館 Gallica の画像。Cing wen ki meng bithe (清文啓蒙) と入力すると閲覧できる。図3の地図：久保智之「シベ語」(梶茂樹・中島由美・林徹 [編] 『事典 世界のことば141』(大修館書店、2009年)) より)

(久保智之、言語学・応用言語学)



図3：現在の遼寧省から新疆ウイグル自治区へ



図4：シベ族の農民一家(1991年筆者撮影)